

友人はモンスター

有坂 広一

欠陥人間は淘汰すべしというのが飯島の主張である。だからと言って、実行するわけにはいかず、また有効な手立てもないので胸の内側に秘めておくしかなかった。とにかく、今まで付き合った者の中で、小山田宏ほど厄介な奴はいない。親密になればなるほど猛毒を垂れ流すのだ。そいつのことを悪魔と呼んでもいい。しかし彼は悪魔の顔をしていないわけではないので誰も気がつかない。至って平凡であり、それどころか善良を装って潜伏している。特に飯島は何百回と付き合っているのに色々なことを熟知している。おかげで神経症的な症状を呈するようになった。世間で言うところのトラウマである。

この手の悪魔は退治しなければ世間は毒に汚染されて歪になっていくばかりだ。小山田のことは人に話して真摯に耳を傾けてくれたら、どんなに気が楽になるだろう。共通の友人知人に越したことはないが、今で

は付き合いはなくなった。

先輩の小山田と最初に会ったのは、渋谷にある日本学院大学の映画研究会である。大学は夏休みだが、その日は映研の会があつて、溜り場の部室に出かけた。西日の差す暑い日で、小山田は上半身裸になつて、首にタオルを巻いており、その風体は見るからに田舎者で、その田舎者ぶりは見事なほど絵になつていた。さすがに部長が見かねて、

「ここは東京のど真ん中だ。田舎じゃない。そんな恰好する奴があるか。もうすぐ女子もくるぞ」

声を荒げて叱つた。道路工事をしている作業員だつて、もっとましな恰好している。飯島も眉をしかめて嫌悪感を顕わにした。だがそれから幾日も経たないうちに小山田は親しみのこもった口調で話しかけてきた。「飯島、君は地方の百姓の生まれだろう」

「どうしてですか」

「そう見えたからさ」

「自分たちは大田区で工場をやっています」

「じゃあ、親父さんは工員かい」

「発想が変ですよ。一応は経営者です」

小山田はへえーと言って首を傾げ、俺は北海道の百姓の倅だけだと笑った。

「今は農家のことをそんな風に言わないですよ。百姓は差別用語ではないけど、放送禁止用語です」

「そうかい。俺は君と同じ種族かと思ったな」

後で分かったが、彼は階級コンプレックスの固まりで、えらく気にして、その心理は度を越していた。

しかし、それがきっかけで親しくなつて、まつわりついてくるようになり、親密な感情を抱いているらしい。

誘われるままにライブや喫茶店やスナックに出かけ、無論部員全体で行動することもあるのは言うまでもない。

ある時、渋谷の繁華街で知らない女二人と親しくなり、うまい具合にラブホに誘ったが、何やら問題が発生したらしく、飯島が隣の部屋で奮闘していると、

ドアをノックする音がしたので開けると、小山田がアホウ面をして突っ立っていた。

「飯島、俺、女に侮辱されたよ」目をキョトキョトさせている。

「侮辱だって」その頃から対等の言葉で話していた。

「あの女、へそを曲げたんだ」

「小山田さんに問題があるんじゃないの」

いつものパターンだろう。隣室に行くと、女はベッドから離れて着替えながらこぼした。

「だって、この人ったら、親戚に社長をしている叔父さんがいるって言うんだもの」

飯島は女の何でもなさそうな言葉をただちに理解した。

「その気持ち、よく分かるよ。貴女は鋭いね」飯島は彼女に好意を覚え、同時に小山田の軽薄な言動に白け、バカな男だと軽蔑した。恐らくセックスの最中に発したのだろう。

「小山田さんはまたコンプレックス丸出しだな」

「事実を話したただだよ」

「どうせ、ハツタリだろう。あまり自分の出身階級にこだわらない方がいいよ」

「出身階級って？」女が聞いた。

「彼は農民の出であることを気にしているのだよ」

「そんなこと気にすることじゃないわ」

「そうだよ」

その日は四人とも黙り込んで出てしまった。どっち

にしろ、彼の口から何が飛び出すか知れたものではない。まだ慣れていない頃、家に遊びに来たことがあって、姉がお茶を出し、菓子を食べながら雑談をした。

小山田は性格のいい姉に好ましい印象を抱いてくれ、姉も後から小山田のことを「面白そうな、いいお友達ね」と褒めてくれた。それでいて後日、姉の話題になった時、許しがたい言葉を口にした。

「お前の姉貴、誰とでもやらせそうな女だな」

これには啞然とした。まだ先輩として距離があるので、下手に反論したり、感情的になるのは避けていた。

二、三日してやっと抗議したら、

「俺、そんなこと言わなかったぞ」

「いや、言いましたよ」

「何か知らんが、気にしないことだ」

「気にするなだつて。無責任だなあ。いくら何でも頭に來ますよ」

「忘れるよ」

「いや、忘れません」

結局、うやむやになってしまった。それでも絶縁せずにするんだのは、小山田にもいい面があり、魅力があったからだ。もっとも小山田に対して大なり小なり誰しも呆れていて、同好会の先輩や同輩と話していた時、

「小山田君は、壊れた人間だな。空想虚言症とか、演技性人格障害とかじゃないかな」

誰かが知ったかぶりで言い出し、それがきっかけで色々の癖を指摘した。彼等は案外人を見ているものだ。

「なるほどね。そんな感じがするな」

皆は納得し、飯島も彼がどういう人間か心得て付き合うようになり、そして飯島なりに小山田の三大巨悪として捕えて分析したものだった。

1 言っていないことと、いけないことが区別できず、したがって、幼児的な自然主義者である。

2 それ故に生まれながらの精神構造をあからさまにさらけ出し、何かと人と比較する癖があり、言うならば差別的な体質の持主である。

3 しかも何かと格好をつけたがるポーズの人である。

年月がたった今も、飯島の頭をしばしばよぎるのは、皆で伊香保温泉に慰安旅行した時のことでこれほど腸の煮えくり返ったことはなく、カリカリすることがあった。小山田はどこかのグループと殴り合いの喧嘩になって、飯島も巻き込まれて、騒動になった。すぐに収まったが、しかし酒に酔っていた小山田は興奮して

いて、まだやるのだと主張し、いくら説得しても聞か
なかつた。連中に腹を立てていると言うよりも、幼児
の特権であるかのようにダダをこね、いつまでも引つ
込めなかつた。それこそ彼の無意識的なポーズで、飯
島に見せつけているのだつた。殺してやりたいくらい
腹が立った。それらのことが後遺症として体に沁み込
んでいて、小山田には憎悪を抱いている。友人、親友
というオブラートに包んできたが、表皮が破けだし深
層心理がよりいっそう見えてきた。先輩であるがゆえ
に遠慮して曖昧してきたが、もっと批判し、怒るよ
うになつた。ネガティブな感情をため込んでならな
いのだ。

その一方で、怖いもの見たさに誘われれば付き合っ
た。社会に出て、何年か過ぎた頃、浅草で飲んだこと
がある。映画研究会の横井に誘われたからだ。新仲店
通りの路地を入った所にあり、光沢のある茶色のカウ
ンターで、十人くらい座れば満杯になつてしまう広さ
だ。壁に古ぼけた色紙が張りつけてあつた。

私が煙草をすっていると、
少女は けむいと云います

尾形亀之助

中年のママはどことなく母親的なものを感じさせた。
三人ともウイスキーサワーを飲みながら、世間話をし
ていたら、他の客が来たので、ママが席を外した。す
ると案内役の横井が、

「なあ、ママはセクシーだろう」自慢げに言う。

「ぼつてりした体つきがいいな」小山田が相槌を打つ。

「ドサ回りのストリッパーみたいだしな」飯島はニヤ
ニヤした。

「とにかく、エロイねえ」

三人ともかなり好色になつていた。そんな話をして
から、飯島が横井に、「理恵さんのお腹は順調かい」と
尋ねた。細君は妊娠して五カ月ほどになる。

「うん、問題ないね。ただ神経質なところがあつてね」

横井がわずかに眉をしかめた。

「どういう風に？」

「相当嫉妬深くてね、ちよつとしたことで、目くじら
を立てるんだ」

「身ごもっているから、ナーバスになっているのだろ
う」飯島が言った。

「それもあるね」と横井。「俺が隠れてポルノDVDを
観ると凄く嫌がるよ。それどころか、妄想するだけで

も非難されるからね」

「男は無神経だからな」

「そうだよ。女の気持ちなんて、分からんよ」飯島と小山田は同じ意見だった。

「そうだ、妻が小山田さんと話したいと言ってたよ」

横井が誘いたがっている。

「そうかい。いつでもお相手するよ」

「今日にでも、ちよつと寄つてよ」

「うん、いいよ」小山田は気のいい返事。「飯島も付き合うだろう。横井は映画関係の資料を沢山集めているよ」

「ああ、見たいね」

「蒐集しているだけで、読んでいないけどな」

三杯目を飲んでから店を出て浅草駅に向かった。横井の住まいは曳舟にあるので東武伊勢崎線のホームで電車を待った。飯島は小山田の隣に立っていることにハツとしてそこを離れた。学生時代に酒を飲んだ帰り、ある駅のホームに立っていたら、酔った小山田が突然飯島の股ぐらに潜り込んできて暴れ出した。彼はギョッとしてベルトを掴んで思いっきり身体を放した。電車がすべり込んできたら危険極まりない。何事もなかったが飯島は怒りに駆られて、

「何をするか！」

小山田の膝にけりを入れてやった。彼は膝を抑えながらしやがんで痛そうだった。いくら酔っていてもこんなおふざけは我慢ならない。腹立ちは収まらず、

「今のは殺人未遂だ、警察に行こう」本人はバカみたいに無邪気なコドモのつもりでいる。引つ張って行こうとしたら、謝るからと頭を下げたので仕方なく放棄した。それ以降不仲になったがいつの間にも元に戻り、しかし小山田と電車に乗るのは避けるようにしていた。横井の家は曳舟駅から徒歩で十四、五分くらいかかり、住居は四階建てのマンションの二階にあって、細君がワンピース型のマタニティドレス姿で迎えてくれた。居間に通され、ソファに座った。

「いつ来ても、綺麗になっていますね」小山田が如才なく褒めると、

「いらつしやるんだったら、お掃除したのに」理恵はにかんだ。

「いいえ、おかまいなく」飯島も言葉を添えた。

「理恵さんが元気にしているから、よかった」

「よく食べるし、よく寝るし、健康そのものだ」亭主もにこやかな表情。

「産まれる子が女の子でよかったなあ」

「俺、男の子だったら、がっかりしたろうな」

「どうして、女の子にこだわるんだ」

「息子とライバルになって、同じ屋根の下で、競争したくないよ」

「その気持ち分かるな」

「奥さんは、どっちがいいですか」

「私はこだわりません。でも横井が望む女の子でよかつたわ」

「とにかく、五体健全であれば由としなきゃ」

飯島が締めくくった。それから映画関係の蔵書の話になり、横井が思い出して「あっちに行こうか」飯島を促し書齋に案内した。小山田は何度も見ているので関心がないらしい。八畳くらいの洋間に書架が四架ほど壁際に並んでいて、ぎっしり詰まっており、またDVDやビデオの収まった棚もあって、これも壮観だった。端から背文字を一通り見、食指の動く本を手にとって拾い読みしたりした。横井は映画に関するのことを書きたいと聞いている。

「今、書いているのかい」

そう尋ねながら横井に文才があるとは思えないかと軽蔑した。

「まだ先のことだね」

「書くとしたら、どういう分野だね」

「堅い論じゃなくて、映画の雑学みたいなものだ」

「雑学ねえ」

「今もつばら集めるのが楽しいよ」

将来はどこかに寄付しようかと考えているようだ。

そんなところだろう、その程度の男だ。また軽蔑の気が湧いてきた。飯島は彼が女たらしの傾向があるので好きではなかった。俺は如何にもモテ系だぞという自惚れが鼻についてならない。十分ほど話して居間に戻ると、小山田が笑いながら喋っていた。理恵が夫を見上げて、

「貴方がもてる話を聞かされたのよ」

薄く笑った。横井は手を振りながら、

「そんなことはないな」

「新しい情報もあるのよ。いけない人ね」一瞬理恵の表情が張った。

「何でもないよ。アハハハ」

他愛ないやり取りがあつて、横井はごまかした。それから二十分ほどして遅くまでいるのは迷惑だからと暇を告げた。夫婦は玄関で愛想よく見送ってくれた。

「いい奥さんだよな」小山田はタバコに火をつける。

「ああ、よくできた奥さんだ」

「飯島も早く恋人を見つけて、結婚しろよ」

「そうありたいよ。ところで、小野康子さんは、どうしているの」

小野康子は共通の女友達だがなかなかの美形で、丸の内の会社でOLをしている。

「彼女は横井といい仲だよ」と小山田。

「エッ、本当かい。ひどいなあ。あんな可愛い奥さんがいるというのに」

「奴はそんなこと、お構いなしだ」

「バレたら大変だぜ」

「奥さんは案外寛大だと思うな」

「馬鹿なことを言うな。ああいう性格だ。分かったらシヨックを受けるぜ」

「そうかなあ」

「あんたは鈍いなあ」

飯島はできたら小野康子のようなコを恋人にしたかったが先を越されたわけだ。いっだったか小山田に、「お前、嫌味な顔つきをしているから、女に敬遠されるタイプだな」ポツリと口にした。

「それに……同席していた友人が付け加えた。「ものの考え方が教条主義的だ」

「それは違う。俺はこれでも柔軟性がある方だ」

反論したら友人は首を振っていた。もしそうだとしたら是正した方がいいと自分に言い聞かせた。

そんなある日、痛ましい事故が起きた。こんな悲惨な出来事はないだろう。衝撃だった。理恵が界限の団地の屋上から投身自殺したというのだ。母子ともに即死だった。小山田からその知らせを聞いた時は言葉を失い、胸がふさがった。葬儀に顔を出すと横井はぼんやりと虚空を見ているだけで、短い言葉で挨拶をしても黙っていて返事もしなかった。帰る時、声をかけたら泣いていた。

「気を落とすな」

二人とも平凡な言葉しか口にできなかった。曳舟駅に向かいながら、小山田は盛んにタバコの煙を吐いた。「気の毒だな。幸せそうな女性が、突然この世からいなくなるんだから」飯島も涙が出た。

「マタニティブルーだろう」小山田が答えを出した。

「それだけじゃない。決定的な理由があるはずだ」飯島はあることを疑っている。

「決定的な理由ねえ。俺には分からんな」小山田はそれ以上頭が回らないらしい。

「横井は、康子さんの件で、何か言っていたかい」

「特に聞いていないね」

電車に乗り浅草まで出て春日部で小山田と別れた。

飯島は一人になると疑惑に取りつかれた。飲屋で飲んでから、横井家に立ち寄った時、小山田と理恵が二人だけになったが、その時の小山田の会話が気になつてならない。まさか、

「横井君はもっぱら、康子さんという女性に夢中ですよ」

などと漏らしたのではないだろうな。もしそんなことがあつたら理恵は嫉妬深い性格だから尋常ではないダメージを受けるだろう。あり得ないことではないので、黙って見逃す訳にはいかなかった。

飯島は家に帰って夕飯を食べて落ち着いた頃、小山田の家に電話をかけた。

「あんたに聞きたいことがある。気分を害さないで、素直に答えてよ」

「一体なんだね」

「理恵さんのことだけど、彼女は夫に女がいるのを知っていると思うんだ。絶対にそうだ。ズバリ聞くとよ。横井の家で、小山田さんが理恵さんと二人だけになつた時、康子さんの名前を口にしなかつたらうな」

「いや、そんなことないと思うな」

「随分、曖昧だなあ」

「記憶なんて、いい加減だよ」

「本当に言わなかつたのかね。よく胸に手を当てて考えてよ」

「考えても、思い出せないな」

「康子さんの存在を知っているのは、横井のほかにも小山田さんしかいないからさ」

「決めつけないでくれよ」

「けど、小山田さんは無意識人間だから、忘れていただけだ」

「いや、記憶にないよ」

「絶対にあるはずだ」

「ない、ない」

飯島は小山田の鈍感そうな受け応えにイラつきながらもとと追究したかったが、これ以上は踏み込めないでそれで一般論として言った。

「不用意な、無神経な言葉は凶器になるからな」

「飯島って、大げさだな」

「大げさじゃないよ」

「この際、横井にも聞いてみな」

「ああ、聞いた。涼しい顔をして、何も話していないと答えたな」

飯島は重苦しい顔つきをして、電話を切った。その

話はいつまでも忘れられず、疑い続けている。そしてだいたい以前に観たフランスの女流監督アニエス・バルダ監督の『幸福』と重なった。

ある日、家族でピクニックに行つて、主人公が妻に郵便局に勤めている恋人が出来たと打ち明け、許しを求める。すると妻は貴方がそれでよければいいと答える。人のいい夫は、

「幸せが二倍に増えた」

と喜ぶ。しかし妻はその無意識の告白にショックを受けて自殺するのだが、本人も周りの者も気がつかず事故と捉えて処理する。主人公の男は皆に同情され、祝福されながら恋人と再婚する。無意識の悲劇である。こんな白痴みたいな男はどこにいるか。小山田もトンでもない言葉を発して友人の妻を死に追いやったのではないか。二人ともハンサムで甘い顔をしていてどこか共通している。ぞつとするほど似ている。

晩秋のある日、乃木坂で開かれている美術展を観に行った。妻の友人の夫が招待券を送ってくれたからだ。それがユニークな絵柄で好奇心をそそった。勤め人たちの朝の出勤風景で皆骸骨だった。度肝を抜かれたものの、意外にもリアルで笑いを誘った。その一点だけ

を見て外に出ると、出入り口近くのベンチに女が一人で座っていて、視線が合った。濃いグリーンのダウンジャケットを着ていて猫系の顔つきをしている。飯島はいつまでも見ている自分に気がついてハツとし、無礼を詫びるつもりで軽く会釈した。向こうも釣られて頭を下げた。飯島は戻って行き、

「ジロジロ見つめて、ごめんなさい」

「変な人が歩いていていると思つたわ」

「貴女も展覧会を見てきたの」

「そうよ」女は屈託なさそうに答えた。

「いい作品は、ありましたか」

「無いわ。退屈して、お腹が空いちやつたわ」

「それだったら、一緒に食べに行こうか」

「私、お金持っていないもん」

「お金はぼくが払うから、気にしなくていいよ」

飲みながら食べることにして銀座の行きつけのバー

にタクシーを拾って行った。彼女は広中夏美と名乗った。夏美は飯島の名刺を手にながら、

「部長なんて、偉いわね」感心した。

「親父の会社だからだよ。力があつて出世したわけじ

やない」

「きつと、お金持ちでしょう。お金があるから、女の

子を沢山ナンパしたでしょう。私を見た時の目つきも怪しかったわ」

「そんなつもりはない」

「隠さなくてもいいよ。あそこは大きいのに」

変なことを聞くのでドキリとした。さらに彼女は言葉継いだ。

「私とやりたいの」

運転手の手前、戸惑って「君はいくつ」話題を変えた。

「二十六よ」

「仕事は？」

「前は化学工場の実験室に勤めていたの」

ということ目下失業中なのだろう。が、それ以上は聞かないことにしたら一応前の会社の名刺をくれ、裏にスマホの電話番号を書いてくれた。面白そうな子だなと興味湧いた。話をしているうちに銀座の目的地に着いたので降りて二階の階段を上った。細長いカウンターだけの店で、黒基調の物静かな雰囲気心地よく、ホステスは何人かいたが、馴染みの女は遠慮してくれた。最初に和牛ステーキを食べながらウイスキーの水割りを飲んだ。空腹というので次々とつまみを頼み、フオアグラを食べたことがないと言うので注文

した。また言われるままにズワイ蟹や特選野菜なども取り寄せた。

「飯島さんは不倫しないの」

「妻一人で満足しているよ」

「つまらない人ね。道徳的な男って嫌いよ」

「親がうるさいんだ。跡継ぎだから信用が第一だと、間違っても、恥さらしの真似をするなって言われている。ぼく自身も、他の女に関心ないしね」

「何が楽しくて、生きているのよ」

「仕事が一番楽しい。うちの製品は海外でも知られているしね」飯島は自慢にならないように話した。「君は何が楽しいかね」

「そうね、人を殺したら楽しいと思うわ」

「アハハハ。ぼくを驚かそうとしているわけ。リアル感が全然ないね」

夏美も飯島も酔ってきたので、初対面同士の緊張感も恥じらいもなく、さらにウイスキーのお代わりをして飲んだ。

「貴方、本当に奥さん以外の女と寝たことないの」

「ないね」

「何もないなんて珍しいわ」

ただ、どこのバーにも好色なホステスがいてね、カ

ウンターの下で悪さをされたことが二、三度あるな」

「イッたの」

「まあね」

「気持ちよかったの」

「ああ、よかったよ。こんなことを話すなんて思わなかった。酔ったよ」

「私もお酒が回って来たわ。酔うと本心が出てしまいそう。人を殺したくなるのよ。貴方、そう思ったことないの」

「そりゃ、思ったことはあるさ。しかし実行したいと思わないね。そんなことしたら、人生おしまいだから」

「現実に殺したいと思っている人はいるの」

具体的に考えたこともないけれど、人物の名前が浮かび上がった。それは小山田宏だった。ついこの間、元映画研究会のメンバーが久々に集まって飲んだ。太っているのや、髪の毛の薄くなっているのや、人相の変った中年男が七、八人顔をそろえた。飯島のところに来た小山田が、

「最近、全然収穫がないよ。飯島、いい女はいないか」

怪しげな呂律で話しかけてきた。

「俺のような堅物に聞かれても困るよ」

「でも、お前、癖のある顔つきは直ったな」

「そうか。じゃあ、もてるようになったのかな」

「もてもも口説かなきゃ意味ないだろう」

「知り合ったら、小山田さんに譲るよ」

「それなら有難いね、楽しみにしている」

そんなやり取りをしたことがあって、それを今思い出していた。

「そいつ、かなりのイケメンでね、女にもてやがる」
彼は夏美に言った。

「私、イケメン、大好き。どんな容貌しているの」

「背が高く、色白、目鼻立ちも整っていて、一見して白人っぽいね。ただね、幼児的なのが欠点だ」

「わあ、可愛い感じ。私のタイプかもしれないわ。紹介して」

「嫌だね。あんな野郎に、いい思いをさせたくないよ」

「いいじゃないの、会わせるくらい。ねえお願い」

「断る」

「私、話を聞いただけで、体がウズウズして、たまらない気持なの」

「抑えてよ」

「お付き合いしてみたいわ」

小山田には譲るようなことを言ったが本音ではない。夏美は執拗にせがみ、引つ込めなかった。考えたら

小山田の外観は女心をそそるが、一度寝ると嫌われる傾向があった。恐らく人格を下げるようなことを平気で口にするからだろう。男は射精した後というもののエネルギ―をすべて吐き出して、人が変わったようになることもある。

特に小山田は空虚感を覚えると何を言い出すか分からない男だ。

無意識のゲスになるのが目に見えている。「最低ね」女に言われそうだった。飯島はそういう例をいくつも知っている。夏美だって同じように一挙に幻滅して怒りに駆られるかもしれない。それなら面白い。そうなのだ。紹介してもいい。「分かった。会わせてあげるよ」と飯島は根負けしたように言うのと、「やったア！」夏美は大喜びをした。それから二人は酔いに任せて喋りまくり、何を言ったか覚えていない。ただ帰る時はタクシーで夏美を品川の自宅まで送り届け、運転手に自分の行先を告げてから眠ってしまった。

一週間後、小山田に電話をして、夏美の電話番号を教え、勝手にやってくれと言ひ添えた。

やがて二人から前後して電話がかかってきて、初対面で気が合って付き合うようになり、うまく行っているとお礼の言葉まで口にした。小山田は例のごとく、

すぐに振られるだろうと見ていたが、そうでもなかった。一ヶ月経っても二か月経っても、二人の関係は継続していた。仕事が多忙になり、そのうち関心を失って、他人の色事などどうでもよくなった。そう思いながら彼の細君とゴタゴタがおこりかねないので、いつそのこと、そろそろけじめをつけると忠告してやろうかと思った。その矢先に夏美から電話がかかってきた。

「あんな馬鹿、顔を見るのも嫌になったわ」

凄じい剣幕だった。小山田はついに実体を暴露したのだろうか。

「嫌な奴と付き合うことはない。即座に別れればいい」

「もちろん、そうするわ」

「簡単なことだよ」

「そうね、訳ないことね」

飯島はせいせいして電話を切った。第三者の彼は余計な心配をすることはなくなった。ところがそれから一週間ほどして小山田から恐ろしい電話がかかってきた。

「俺はあの女から毒を盛られた。毎日激痛に悩まされているよ。警察にも訴えた」小山田が苦しげな声を上げた。「ああ、痛い。猛烈に痛い」

「だけど夏美とは限らないだろう」

「夏美しかない。飲んでいる時に何か入れられたんだ。医者はナトリウムが検出されたと言ったから」

「それはないだろう」

飯島は口で否定しながら、犯人は夏美に違いないと考えた。彼女は化学工場に勤めていたから毒のある薬品くらいは秘匿しているだろう。いつかそれで人を殺そうと考えていたに違いない。愛が覚めて、相手の欠点や鼻についてきたのだ。彼の欠点は言うまでもない。やがて警察から連絡があり、飯島は任意出頭を命ぜられた。夏美はすでに逮捕されて拘留所に拘留されている。担当の刑事は五十がらみの落ち着いた男である。

「貴方に色々とお聞きしたいことがありますね」

飯島は興奮を抑えながら何でも聞いて下さいと答えた。質問されるままに夏美のこと、小山田のことについて答えた。小山田の時はまるで心理学者のように筋道立てて明晰に語った。言葉が熟成していて練れており自信に満ちていた。

「よくご存知ですね」

「長年の友人ですからね」

彼は答えながら胸の中のを吐き出して満足感を覚え、笑みさえ浮かべた。語らせてもらって、こんな気持ちのいい思いをしたことはなかった。

「話す機会を頂いて、感謝しております」

「はい、はい」

「どんなことでも申し上げます」

「お願いします。ところで、貴方は被害者を、どんな残酷な手を使ってもいいから、虐待してもいいと唆したそうですね」

さすがの飯島も急激に目の色が変わった。

「いや、そんなことは一言も口にしていません」

「しかし、広中夏美は、そう申しておりました」

「そんなのは、真つ赤な嘘です。あの女は素面でも、人を殺してみたい、と言うくらい、いい加減な性格です」

「そう、そこです。その際、貴方も酔っていて、それなら小山田君を殺してやってくれないか。自分にはできないから。その代り二百万円払う、と約束しそうじやないかね」

「覚えておりません」

「相当飲んでいたようだね」

「はあ、バケツで飲むくらいに……」

「今は飲んでいないから、冷静になって思い出せるよね」

「いえいえ、思い出せません」

しかし、普段から潜在意識下に沈んでいる憎悪や復讐心を想起し、言語化すれば酒に酔った時の言葉を再現できないことはない。そう考えるとパツと小山田の言動が浮かんできて、彼は激情に駆られそうになった。その雰囲気を察した刑事は、

「飯島さん、落ち着いて」やんわりと制した。

「私はいいつを心から憎んでいます。紛れもない殺意があります。いや、殺意以上のもので、かりにピストルで頭を打って即死させるよりも、治療不能の重傷を負わせて、三十年も四十年も苦しめてやりたいと考えているほどです」

「酔った時もそういう気持だったわけだね」

「それは何とも言えません」

「分かった」

「小山田の怪我は治らなのですか」

「それは専門家でないとも何とも言えないね」

「しかし、苦しんでいるのは確かですよね」

「それはそうだね」

「どうか、死なせないようにして下さい」

「もちろん、医師たちは最大限の努力をしています」

「もし、彼が死んだら土葬して下さい」

「何を言うかね。日本の法律では、そんなことは出来

ない」

「私は、奴が死んだ後も墓場から引つ張り出して、殴る蹴る、ちぎる、の乱暴をしてやりたいのです」

「あんたは相当いかれているね」

「いや、あいつの方が異常です。低能の薄馬鹿の邪悪な人間です。お蔭で私は辛い思いをしてきました。たとえばですよ；自分は小山田から無意識的に何十回何百回も侮辱的な扱いをされたか、そのために気がおかしくなりそうになりました」

「いちいち例をあげ、長々と喋ったので刑事は何度も欠伸をした。飯島は飯島で、つい興奮して、くそつたれの馬鹿野郎と叫んだりするのだった。

「君、落ち着きなさい」

「私は狂ったわけではありません。一過性のものから大丈夫です」

「分かっています」そして最後に、「近々、精神鑑定を受けることになりました。その時はまだ呼び出しますから協力してください」

自宅に戻ると、父が、「平社員に降格だ。当分出世はないからな」苦々しげに告げた。

「馬鹿なことをするのね」

母も非難した。妻は夫婦の寝室で泣いていた。

次の日、大宮市の大きな病院に入院している小山田を見舞った。彼は三階のベッドに苦しい息を吐きながら横たわっていた。

「俺も事情聴取を受けて、色々聞かれた」飯島は報告した。「きつと罪名がつくだろうな」

「迷惑をかけたな」

「かまわないよ。それより、小山田さんはどうだい。

少しはよくなったかい」

「全然治らないな。こんな辛い思いをするくらいなら、死んだ方がましだ」

「いや、死なないでくれ。死んだら元も子もないからな」

「俺は生きていたくない」

「現代の医学で必ず治るよ」

「俺に効く薬はないそうだ」

「そんなことはない、大丈夫だ」

「心配して見舞に来てくれるのは、君だけだ」

「俺は誰よりも関心を持っているからな」

「有り難う。嬉しいよ。でも、この先どうしていいかわからないけどな」

「俺だって似たようなものさ。時々、見に来るよ」

「歓迎するよ。病人は孤独だからね」

「じゃあ、失礼するから。お大事に」
病院を出て歩いていると、自然に笑みが浮かんだ。